

## <エッセイ>笛吹き of 四〇年

著者	坪井 秀人
雑誌名	日文研
巻	55
ページ	32-37
発行年	2015-09-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006464">http://doi.org/10.15055/00006464</a>

な問題は、両国ともお互いに不信感と警戒心を持っており、両国内に相手の立場から世界を見ようとする人がいないことである。それでも、私自身は日本首相による靖国神社参拝のようなよほどのことがない限り、日中関係はこれ以上悪化することはないと思う。日中双方にとって、当面、最も重要なのは、互いに慎重に対応し、関係改善の流れと雰囲気を持していくことであろう。

（天津師範大学政治文化と政治文明建設研究院研究員／

国際日本文化研究センター外国人研究員）

## 笛吹きの四〇年

坪井 秀人

フルートを吹いている。一般には趣味、ということになるのだろうが、ほぼ例外なく毎日楽器を出しては吹いているので、それを「趣味」と呼ぶのはそぐわないものを感じる。では何なのかというと、それが自分ではよくわからない。間違いなく言えることは、僕が一介のアマチュアであるということである。そしてその立場が僕には大変好ましいということなのである。音楽大学を出れば必ず音楽家になれるわけではない。音楽大学を出なければ音楽家になれないわけではない。とはいえ、音楽の専門教育を受けて音楽で生活の糧を得るプロの音楽家の生

活にあこがれがなかったといえれば嘘になる。しかし、自分にそんな天分がないことはわかっていたし、仮にあったとしても、運にも左右されることの多い芸術の競争社会の中で生き残っていくのは、学者の生活以上にしんどいことだろうと思ってきた。

フルートという楽器を手にしたのは高校一年生の頃だったろうか。どうして楽器を始めたかと思ったのか、ある時期までは覚えていたはずだが、今はもう思い出せない。それぐらいこの楽器との付き合いが自然なものになってしまったとも言えるのだが。僕は何しろ歌を歌えば音痴だったし、音楽という科目も大の苦手だった。小学校低学年のとき、木琴が僕だけたけず、母親が学校から呼び出されたとか、中学の時、リコーダーが一人だけ吹けずに居残りさせられて、いつまでも吹けずに泣きそうになったとか、そんな苦い記憶ばかりが思い出されてしまう。当然のことながら、音楽のセンスがないと見切った親には、僕にピアノを習わせるなどという発想はひとかけらもなかった。

それでも、どれだけ音楽が苦手でも、僕は音楽のことが好きだった。音楽ではいつも悪い成績しか取れなかったのも、高校の時には芸術科目は美術を選択したくらいだが、コーラスで下の声部を歌える同級生やピアノで『展覧会の絵』なんかを楽々と弾いてしまう友人たちを羨望のままなぞして遠くから眺めていた。音楽を聴くことには夢中になっていたし、何しろ中学を卒業した春休みに観たルキノ・ヴィスコンティの『ヴェニスに死す』に打ちのめされて、その映画で使われていたマーラーの作品やら、それからベルクなどの暗い音楽に背伸びしてのめりこんでいたというのが、フルートを始めた時期の高校生の僕だった（因みにヴィスコンティの作品はその後大学生の時分までにはほぼ全作観た）。

告白すればフルートという楽器が格別に好きだったわけではない。何しろリコーダーの居残

り特訓のトラウマの持ち主であったくらいだから。本当を言うと、実はクラリネットの音に憧れていた。それで親に頼みこんでクラリネットを買ってもらうことになり、父親と一緒に家から一番近い楽器屋さんに見に行ったところ、なんとクラリネットはその時は在庫がなかった！「フルートならありますよ」楽器店のおじさんのその一言で、僕の笛吹ききの人生が決定したのである。まこと不純な出会い系であった。

最初に手にした楽器はYFLというヤマハの初心者用の楽器で、もちろんキイの穴の塞がったカバード。一人では始められないということで自宅の近所の五反城教会で開かれていたレッスンに通うことになった。先生は近藤富士子先生という方で、譜面もろくに読めなかった僕に、これを読めと『楽典』なんか貸してくれたっけ。最初に吹いたのは「白鳥」（サンサーンス）とか「トロイメライ」。まさによちよち歩きからの開始だった。

大学入学後はオーケストラに所属して、以来数年の中断はあるものの、名古屋大学交響楽団で六年ほど、名古屋では他に室内管弦楽団を少々、大学院時代にはOBオケの公演を学生オケ時代の仲間たちと企画、それが今日まで続いている社会人オーケストラ、名古屋ムジックフェイライン管弦楽団の結成へと繋がった。名古屋大学に奉職した期間の後半は名古屋大学交響楽団の団長（顧問）も務めさせていただいた。

金沢時代の八年間では地元の社会人オケや臨時編成の室内オケの教会コンサートに出演したぐらいで大人しくしていたのだが、一九九二／九三年のシーズンにウィーン大学の在外研究でウィーンに滞在していたときに、ムジックフェラインと並ぶウィーンの伝統あるホール、コンツェルトハウスに所属するアマチュア・オーケストラであるコンツェルトハウス演奏協会（当時の正式名称はKonzertervereinigung der Wiener Konzerthausgesellschaft）の定期演奏会に出演

できたことは、正直ちょっと誇らしい。指揮はアルバン・ベルク弦楽四重奏団の初代ヴィオラ奏者、ハット・バイエルレで、僕はウィーン・フィルのクラリネット奏者ノルベルト・トイブルがソロを受け持ったウエーバーの協奏曲第二番で出演。これは一生の思い出だ。

ともかく学生時代以来今まで、こんなに色々な曲をオケで演奏できるなどは、楽器を始めた高校生の時には思いも寄らなかつた。ベートーヴェンなどにもそこそこは関わったが、大人数のオケに所属してきたこともあり、どちらかと言えばマーラー（四・五・一〇番と『大地の歌』以外の全ての交響曲。因みに一番と七番は二回演奏）やリヒャルト・シュトラウスのような二十世紀の大編成の作品を演奏することが多かつた。

自分にとってこれはという記憶に残る演奏体験といえば、学生時代初めてメインのトップを吹かせてもらったブルックナーの交響曲第九番、マーラーの二番、三番それに九番、シベリウスの六番（これも二回）、バルトークの『管弦楽のための協奏曲』、ドビュッシーの『海』、それにフォーレの『ペレアスとメリザンド』、声楽付きの曲ではバッハの『マタイ受難曲』とハイドン『天地創造』、モーツァルトのハ短調ミサ曲あたりだろうか。

これだけ素晴らしい作品の演奏に関われたことは（もちろん多くは完璧には及ばない演奏内容だったとはいえ）、幸運なことだったとしか言いようがない。もし今後生き永らえて、なおかつチャンスがあるのなら、マーラーの『大地の歌』と一〇番（クック版）が吹けたら、もう思い残すことはないと言ってもいい。いや、その上でもし可能ならマーラー九番をもう一度、ブルックナーの九番もふたたび出来れば……などと、これだけ欲深くいれば、簡単には往生できまい。とはいえ、寄る年波にも勝てず、忙しくなる一方の仕事との調整も難しく、毎年オケ人生の〈引き際〉を考えるようになってきている。悲しいがこれも現実。

さて、フルートのレッスンは、その後、学生時代の加藤敏先生、須藤辰郎先生（名古屋フィルハーモニー交響楽団）、大海隆宏先生（同）と続き、金沢から名古屋に戻ってからは中越志奈先生、そして現在の寺本義明先生（東京都交響楽団首席）と様々な先生に師事してきた。中越先生からはフレンチ・スクールの伝統に則った音色づくりを学んだ。レッスンの前半はひたすらアンブシュアに神経を集中しての音作り。一つの音を延ばすロングトーンを延々と続けるなかなか過酷な練習。しかし、それまでの力任せの音出しとはまったく違う新しい世界を見せていただいた。かつては名フィルの、そして現在では都響の首席を務められる寺本先生からは、ニコレ、ツェラー、ブラウという、ドイツ・フルートの系譜に連なる大きな音楽の骨格のつかみ方と、何よりも、練習自体をどのように論理化するかという、音楽におけるロゴスの世界を教えていただいている。音楽の構造をどう理解したらよいか、自分の身体と発音される音の関係をどう制御したらよいか、寺本先生のレッスンには毎回新鮮な発見が必ずある。五十歳を過ぎてもこうして知らない扉のありかを見せただけだということ、生きているのも無駄じゃないと思わされる貴重な経験だ。



写真の下の楽器が長年愛奏してきたヘインズ（本体は銀製でリップが金）。これは中越先生からお譲りいただいたもので、必ずしも吹きやすいとはいえないが、すばらしく甘い音色を持ったこの楽器を通して、現代のフルト界を席捲するパワー・フルトの傾向とは異なる、（誤解を恐れずに言えば）古き雅なる笛の音を探求する手がかりを得られたと思う。ルイ・ロットからヘインズに移行してフレンチ・スクールを守り続けたランバルや、終生一管のロットを吹き続けた、わが最も敬愛するところの笛吹き、フェルナン・デュフレヌの演奏の素晴らしさも、この楽器を持たなければあまり実感できなかっただろう。

もっともオケをやっているとは抜けのよくて野太い音がほしくなり、持っていた木管フルト（ファイリッブ・ハンミッヒ。第二群の方だけれどこれで『マタイ』も吹いた）を手放して、それを売ったお金でフォリジの頭部管を購入した（写真上）。ヘインズの系譜と関わるフランスの楽器だが、歌口がヘインズより大きめで独特の卵形、楽器がとても豊潤に鳴ってくれる。一時期はこれにすげ替えて吹いていたが、ドビュッシーやフォーレを吹いた時に、スレンダーなボディに少し立派すぎる顔を付け替えたみたいで、本体との微妙なインコンパティビリティが気になり、あえて本来のヘインズに戻した。今後こうした浮気をするにはそうはないと思うが、宝くじがもし当たったら、一昔前に作られていたヘインズの本管を入手する、というのが、わがはかない夢だ。かくして業の深い笛吹ききの人生はまだ当分は続きそうだ。

（国際日本文化研究センター教授）